

Institutiovm calculi integralis.

1768-1770, 3 volumes

Leonhard Euler (1707-1783)

レオンハルト・オイラーによる、積分に関する研究書です。
表紙見返しにマールブル紙が使われています。

今日私たちが手にする本の姿はいつどのようにしてできたのか。その答えは 15 世紀中頃のヨーロッパにおける活版印刷術の発明にあり、古い本には今日の出版文化へとつながる歴史と秘密が刻まれています。今回は北青葉山分館で所蔵する、約 250 年前にヨーロッパで出版された本を例に、そんな歴史と秘密の一端をご紹介します。

本書には表紙の見返しの部分にマール模様（marble）の紙が使われています。「大理石（marble）」を意味するこの不思議な模様の装飾紙は、マール紙職人の手で 1 枚 1 枚作られていました。マール紙はもともと革装本の見返しによく使われていましたが、19 世紀になり出版物の数が増えると、装丁にかかる費用と時間を節約するため革の代用として表紙に貼られるようにもなりました。

マール紙を作る工程は偶然に左右されるため、同じものは二度と作れません。ただ、模様そのものには一定のパターンが存在し、伝統的なもの、特定の時代や地域で流行したものなど、これらを組み合わせアレンジすることでバリエーションは無限に広がります。

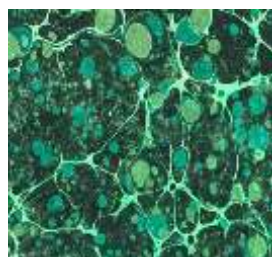
孔雀模様



ゼブラ模様



小石＋静脈模様



小口へのマーブリングは手作業の職人ならではの技で、美しく仕上げるには高度な技術と熟練した感覚が不可欠でした。このような小口へのマーブリングは装飾としてだけでなく、ページの抜き取りによる改竄を防ぐ目的で帳簿などにも用いられました。

小口のマーブリング



附属図書館本館でこの秋、本の歴史と秘密に迫る展示と講演会を行います。お楽しみいただければ幸いです。

【展示】

■東北大学附属図書館 本館多目的室

■2018.11.1(木)－11.18(日) 10:00－17:00

【記念講演会】

■2018.11.14(水) 13:30 開演

■「活版印刷の発明者・グーテンベルク」小川知幸氏
「金属活字組版の実際」(活版印刷実演) 菊地淳氏